

100年後の公園

1160061 児玉 翔

高知工科大学 システム工学群 建築・都市デザイン専攻
指導教員 重山 陽一郎

1、はじめに

私は日本造園学会の開催する90周年記念全国大会・U-30国際アイデアコンペティションに参加し、東京を舞台に2105年の公園のについて考えた。コンペの要項は以下の通りであった。

”「100年後に公園は無くなる」、これは20世紀初頭の東京市公園課長、井下清が書いたエッセイのタイトルである。

公園は本来、上下水道網等と並んで、都市の公衆衛生改善のための手段の一つであった。井下は、公園の本来的な役割に着目しつつ、「公園は目的ではなく手段」との立場より、公衆衛生をはじめ、公園を必要とするような都市問題が解決すれば、自ずと公園は消滅すると考えた。

その後、都市開発等により、公園面積は拡大し、様々な工夫が積み重ねられ、その質は向上してきた。

しかし、井下のエッセイからおおよそ90年経た2015年、公園はその本来的な役割が失われても良いはずなのに相変わらず都市に存在し続けている。では、なぜ今も公園は存在し続けているのか。

ここでは、2015年からさらに90年後の2105年を見据えた「公園の未来」の考え方とその具体的な空間のイメージとデザインを考える。”

本設計では、舞台を高知に変え、時代背景、公園のデザインを考え直し、高知県での100年後の公園について提案する。

2、公園の歴史と役割

日本における公園の歴史は明治以前から始まり、馬場などの遊観地や、寺社境内、水辺空間に人が集い、語らう場としての役割をもっていた。明治以降になると太政官布告によって、公園制度が発足され、庶民の遊観地は「公園」へと位置づけされることとなる。その後近代的な都市建設によって公園の配置論等が考えられ始める。

関東大震災は公園の大きな変化をもたらし、造園デザインの需要が増加することとなる。1956年都市公園法が施行されてからは、都市の公衆衛生改善のための手段の一つとされた。技術によりカバーできるようになると、手段のための公園は減少し、その土地に役割が付加され様々な公園が登場するようになった。

3、コンセプト

100年という年月の中で、公園という空間は、技術力の進歩によって、今までの公衆衛生改善の手段という役割が無くなり、社会的な位置づけがされる前の「憩い」に特化した空間、人が集い語らう場所としての空間に変化すると考えた。そうした考えに加え、100年間の社会的背景を考慮し自由な空間イメージとデザインをつくりあげることを目指す。

表1、時代別の公園の役割、要素

	100年以上前	100年前	現在	100年後
公園の役割	・人が集い、語らう場	・都市内のオープンスペース ・防災対策 ・都市の公衆衛生改善のための手段		・人が集い、語らう場 ・「憩い」に特化した空間
公園として位置づけられる空間	・馬場などの遊観地 ・寺社境内、水辺空間	・行政上で公園と位置づけされた空間		・都市と自然の中間的空中庭園
人の活動の位置	・地表面	・地表面 ・高層ビル ・屋上		・地表面から少し離れている ・旧市街地 ・郊外
都市と人々の暮らしの関係		・都市に住むことでのみ幸福感を得れるという考え方によって、集団する必要性があった。	・密集生活、都市での生活の必要性が薄まる	
建築材料と建築方法	・自然材料+手加工	・工業化、規格化された材料+手加工、建設機械		・溶融材料+3Dプリンタ

4、時間経過による時代背景の仮定

2015年から2105年の90年間で人類の科学技術、情報技術は大きく発展する。

- ①車の全自動化
- ②空を飛ぶ機械の登場。物流、人流の変化。
- ③空からの受け皿となる空間の必要性が高まる。
- ④3Dプリンタの普及によりモノのあり方が変化。
- ⑤南海トラフ地震によって被害を受ける。

新しい技術の登場によって高知県では新しい空間形成に繋がる。

また、南海トラフ地震による被害や、技術力の進歩によって必要なくなった空間が発生することで、都市は収縮する。収縮に伴い、人々は旧市街地に集まり、高知市旧市街地が街の中心地となる。

5、計画地

計画地は、高知県高知市土居町周辺。ここは、高知城及び旧市街地に近く、また鏡川が側を通り、筆山の尾根がのびてくる土地である。また南海トラフ地震による津波被害が想定されている土地で、高知の歴史に寄り添いながらも、全く新しい空間が形成される可能性の高い敷地である。

6、時代背景に伴った新しい公園の形成

前に示すような時代背景により、人々はドローンなどになり、空を飛び移動するようになる。そこで、新しく空からの受け皿となる空間を必要とし、その空間は他の建物より高いところに存在するため、見晴らしが良いというポテンシャルを持った空間となる。そこに広場、カフェ、展望デッキを設ける事で、「憩い」に特化した公園空間へと変化させる。その空間は、3Dプリンタで出力され、カタチとなる。人間は地表より少し高いところを主に活動拠点とするようになり、その後、南海トラフ地震によって被害を受け地表面を自然に解放することができるようになる。

そうした中で、この公園が様々な場所に立ち並ぶことによって今までの平面的な都市計画から、断面的な都市計画へと変化させることができる。

また、地表面を自然に解放することによって、この公園が環境の再整備のきっかけとなりうる。

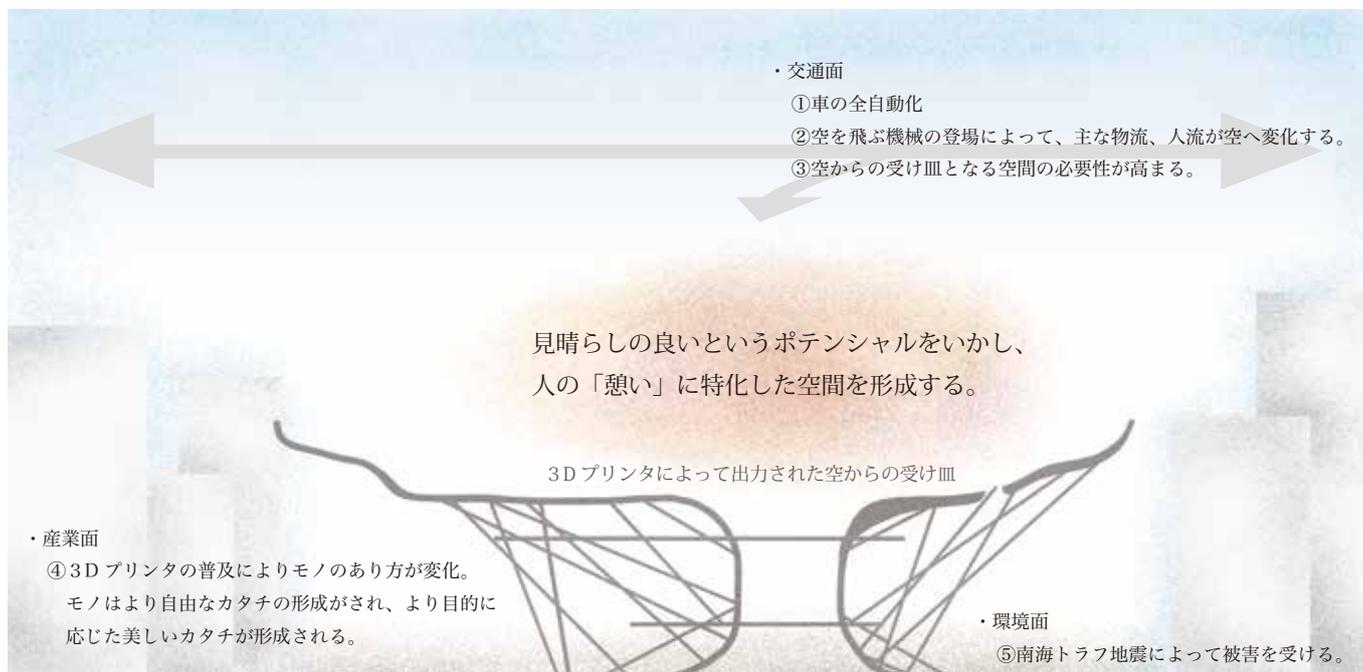


図1、公園形成ダイアグラム



図2、公園の登場によって起こる断面的土地利用

7、公園の構成

この公園は地表から少し離れたところに盃状の芝生広場を設ける。都市から少し離れることで、芝生広場に立ったときに、視線が都市に触れることなく、周辺の山々と、芝生と、空で満たされるような空間を形成する。また、空の物流、人流の中で立ち寄るためのカフェを付加し、高さというポテンシャルを活かすためにも、展望デッキを併設する。

また芝の管理用としての貯水タンクを設けることで管理面でのコスト削減を図る。



図3、公園の内部鳥瞰図

8、ディテール

公園内のカフェは、公園を構成する地盤がふくらみ、その中に空間が形成されることで、柔らかい内部空間を形成し、芝生広場との調和を図る。

また展望デッキにもカフェを配置し、ここでは、比較的暗い空間となるため、上部の芝生広場とは違った落ち着いた空間を目指し、カフェの壁を自由曲線と直線を織り交ぜて構成した。このようにすることでカフェの内部空間を引き締め、曲線をより際立たせた空間とした。

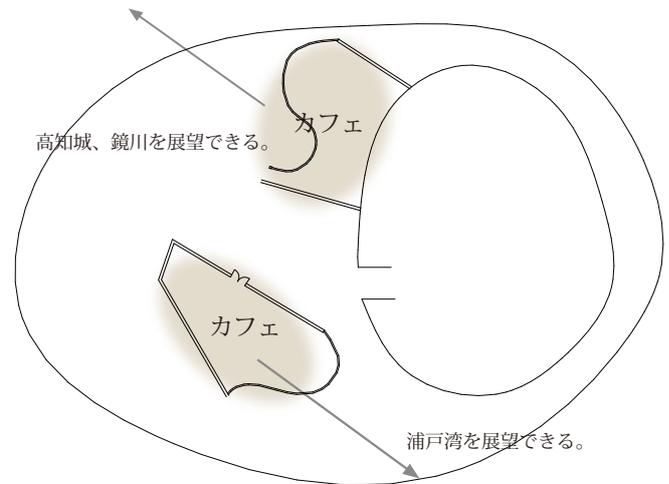


図4、展望デッキ階 平面図

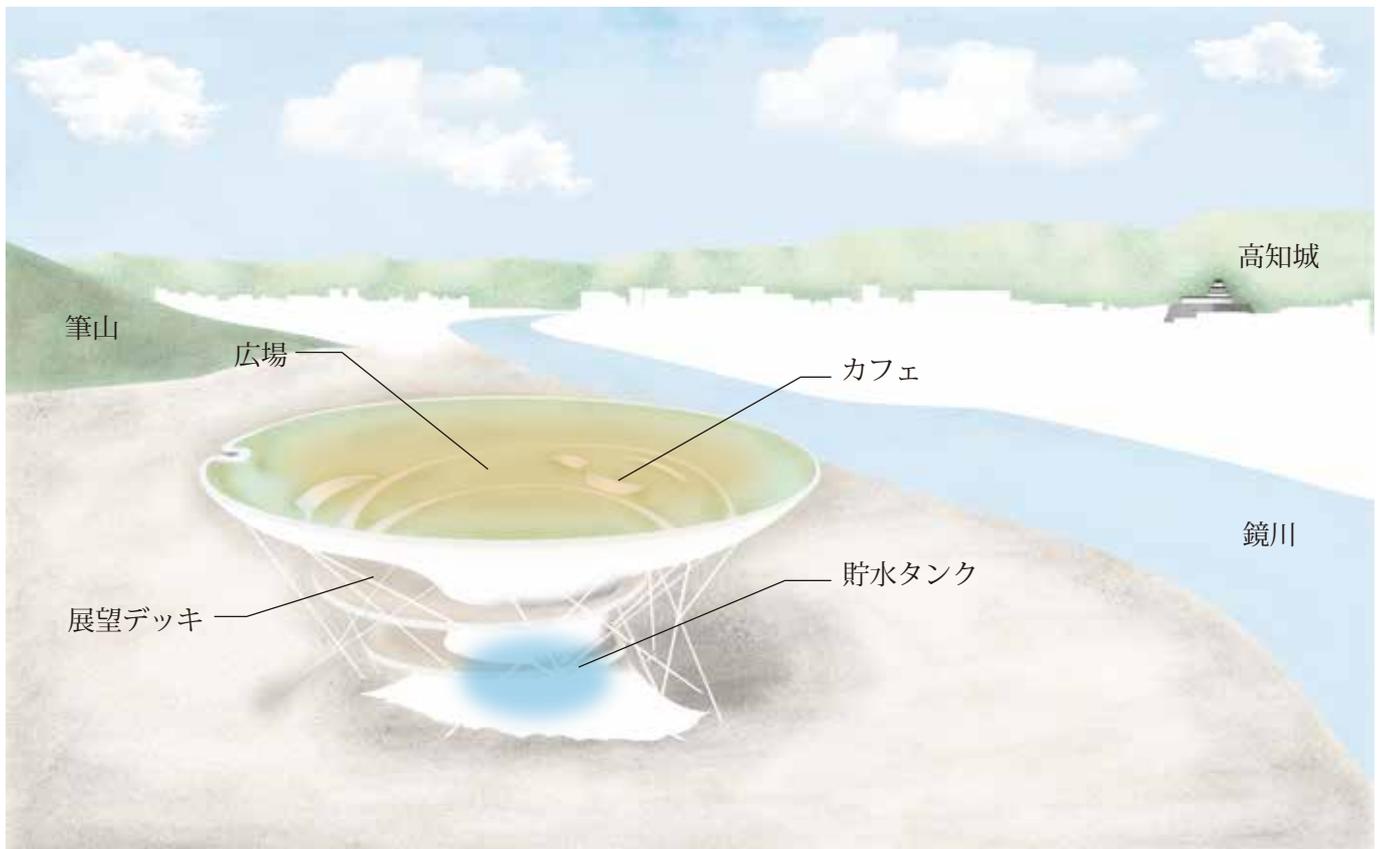
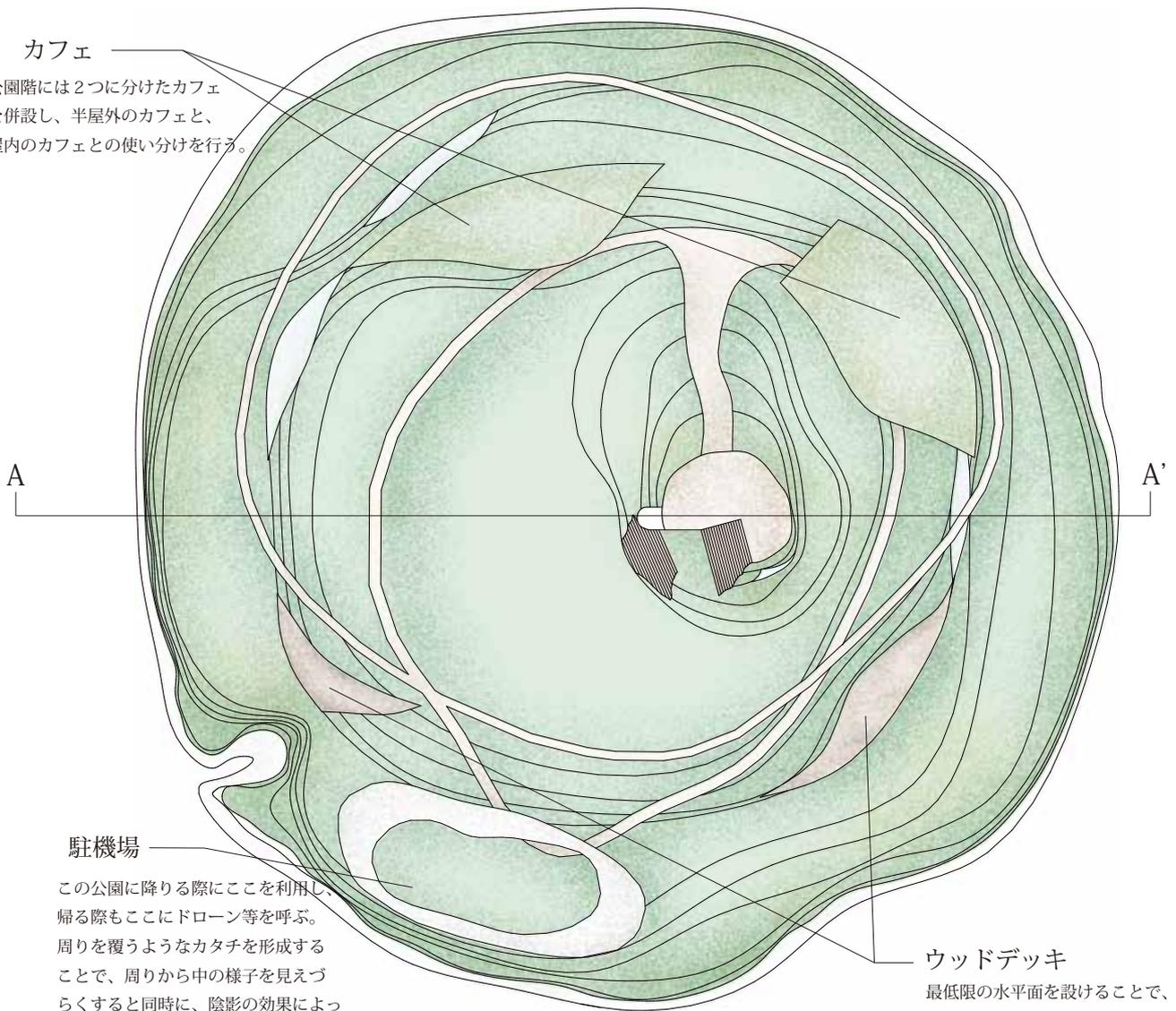


図5、公園の鳥瞰図

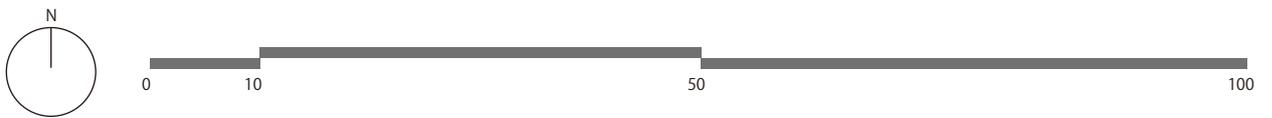
カフェ
公園階には2つに分けたカフェを併設し、半屋外のカフェと、屋内のカフェとの使い分けを行う。



駐機場
この公園に降りる際にここを利用し、帰る際もここにドローン等を呼ぶ。周りを覆うようなカタチを形成することで、周りから中の様子を見えづらくすると同時に、陰影の効果によって駐機場を出たときの開放感を増幅させる。

ウッドデッキ
最低限の水平面を設けることで、芝面には座ることや寝転ぶことへの抵抗がある人でもこの空間を楽しめるような空間を形成した。

図6、公園階 平面図



非常用階段

貯水タンク

図7、A-A' 断面図